



年明けから大学に行く以外は、自宅で3月末にワタリウム美術館で始まる青木陵子との二人展に向けての生活でした。自宅に籠って制作するのはよくある日常ですが、勤めている大学や、子供の中学が徐々に非日常化していくことから、制作スペースがシェルターのようにも感じられてきました。

設営期間中、オリンピックが中止になった日を境に、感染者数が不自然なほど増えていきました。想像をはるかに超える事態の中に自分達は置かれているのかもしれないし、その中で作品を設置し、オリンピックに合わせて完成したほぼ客のいないホテルに帰る日々が、どんどんSF化していくようでした。設営のみで開かない展覧会が増えていく状況の中、自分たちが地球で最後の展示をしているような気分にもなりました。



現在、展覧会はウィルス対策を行い閉じることなく続いています。美術館の作品を見せ続けるという態度に本当に感謝しています。自分の知る範囲では開館していることに肯定的な意見が多いです。美術館は経済の競争から少し離れたところにあるからなのかもしれません。展覧会にはお店の作品もあり、現状でも販売は細々と行っています。ただ、当初考えていたような、人を集めてのイベントなどはやはり難しいです。そういった中で昔の疫病対策でもある「沈黙交易」という交易方法をベースにした、非接触のワークショップを始めました。大学ではあらゆることがオンラインに切り替わっていたので、オンラインではない何かを考えることも気分的に必要でした。そんなアイデアを加えていけたらと思っています。

日常生活では、自宅授業の子供と協力してメダカをかなり増やすことが出来たこと、ひとけのない山間の釣りに出かけて感じる体の自由さは今までにないものだったことなど、生きてるこ



とに関する感覚がいつもよりはっきりとありました。展覧会を見に来てくれた友人から、「入口検温が自分もウィルスも動物だと確認してから展示を見るようで良かった」ということを聞いて、妙に納得出来ました。



一方、エイズの頃と同じような差別が今回も起こっていたこと、政権が非常事態の隙を狙って自己保身に走ること、その政権に日頃から嘘を聞かされ続けていることで根付いた不信感が非常事態の中で自分に及ぼす影響を体感させられたことなど、腹の立つこともキリがありません。

伊藤存

2020年6月